

Report

ダウンアダーの国から ㊦

大貫映子

自分の言葉で語る豪州選手

今回は『女性とレジャー』をテーマにした研究報告について書く予定だったが、原稿を書いている今はアトランタオリンピック真っ盛り。そこで急遽、『豪州で見るオリンピック雑感』をお届けしようと思う。

異国の地で見るオリンピック。どの国でも同じだと思うが、自国選手のメダル有望の種目中心にしかテレビ中継番組が組まれておらず、ほとんど日本選手についての情報が入ってこない。その上、非常に偏った種目の選び方をしているので、見ていて腹立たしくなることがよくある。新聞でも「水泳だけがオリンピック種目ではない！」という投書が載っていた。前半はひたすら、水泳、乗馬、ボートなどの繰り返し。しかも豪州関連のみ。でも、これは、日本に住んでいる外国人も同じことを思っているのだろうけれど。

そんな中で、さすが、陸上のマラソンは花形種目。豪州選手は今回それほど強くないにもかかわらず、じっくり2時間レースを放映。しかも、有森選手の頑張りをずっと画面は追いつけていた。エチオピアのロバ選手は強かったですね。ゴールでのなんとも言えない笑顔が良かった。ただ、もうひとつの不満として、こちらのテレビでは各競技を映した後のフォローがひどい。優勝、あるいは上位の結果などを出さないで、すぐ次の競技へいってしまったりする。地元の人も「イライラする」といっていた。その上、自国選手以外の競技後のインタビューの放映など一切やらない。新聞にも載らない。

そうそう、それにしても、一瞬、日本での大会かと思わせるほど、沿道には日の丸だらけでぎょっとした。



▲ 息子の 大介君は "GO Japan!" と、ずっと日本選手を応援して

一方、私の水泳仲間もひたすら豪州選手しか目に入らない。ときには、自国選手が銀をとった種目で、一位の選手にドーピングの疑いをかけたり、バタフライの潜水を禁止すべきだ、そうすればオージーが金だったのに…と極論化する。

女子マラソンでは5位程度までは映したものの、その後はすぐにボート会場に。マラソンは特に一人一人のゴールの姿に感慨があるのに、とこれまた欲求不満。豪州選手のゴールすら映さなかった。そこで、ふと思ったのだが、まさか放映権料の差で手に入るシーンが限られてしまうということがあるのだろうか？

水泳最終日の豪州の水泳陣。ファンは沸きに沸いた。前半ほとんどの選手が良いタイムを出せなかったのが、一転して女子 200mバタフライで金、銀を皮切りに「目が覚め」、男子1500mでも金、銀。しかも不調が続いていた大ヒーローのバルセロナ金メダリスト、ケリン・パーキンスが見事に2連覇。予選最下位での決勝進出だったために、よけいドラマチックな有終の美を飾った。一気に水泳でのメダルを12に増やし、新聞は1956年のメルボルンオリンピック以来の好成績と書き称えた。その前日まで「意志が弱い」「ガッカリだ」とプレッシャーをよけいに与えるものばかりだったのに。これも、万国共通のマスコミの姿勢のようだ。ただし、気持ちの良いのは、選手たちが自分の言葉で状況説明し主張することに慣れていることだ。

エリー・オヴァートン (22歳・個人メドレー) という女性スイマーは「私たち選手に失望しないでほしい。自分たちがよっぽどがっかりしているのだから。自分たちがどれだけこの日のために時間を費してきたことか」と外野のうるささに、ズバリ。そして「怒りのスイマーたちは最後に笑った」。(7/29 ザ・オーストラリアン) 日本でもスポーツをする側からの生の声は、はつきりともっと外に向けられるべきだと思う。

〈おおぬき・てるこ〉

82年、日本人で初めて英仏海峡横断水泳に成功。93年7月より豪州パースに滞在。現在、エディス・カーワン大学人間健康学部 (レジャーサイエンス) マスターコースに在籍中。WSF ジャパン会員。